

---

# OA&W

緑野 山葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

O A & a m p ; W

### 【Nコード】

N 0 6 3 8 Z

### 【作者名】

緑野 山葵

### 【あらすじ】

5年前に戦争を終えた平和な国セルドア王国で、心に傷を抱えた少年の運命が、あるひとつの出会いによって大きく変わっていく。

## 序章（前書き）

初めて書くので温かい目でご覧ください。

## 序章

気づけば俺は、手足を縛り付けられ、ベットに横たえられていた。周りには何人かの白衣を着た研究員。そして、見覚えのある顔。

そうだ。思い出した。俺は自らを差し出してでもこの国を救う覚悟でここにいるのだ。

「気分はどうだ？」

俺のよく知るその男はさして心配していなさそうな抑揚のない声で聞いてくる。

「ああ、最高だよ。これで俺は英雄になれるんだからな。」

「では始める。」

「はい。」

研究員の一人が注射器に入った？それ”を俺の体へと注入した・・・

そう、僕の兄はこの国に殺されたのだ。

この墓石の前に立つのももう何度目だろうか。

そして、

いくつもの屍を乗りこえて成り立っているこの国で、大事な人の死を乗りこえられずにいる僕も、

例外なく今を平凡に生きている。

そう、この日までは。

## 第1話「偶然の必然」

5年前、この国セルドア王国は、隣国のクライス皇国との戦争を終えた。

クライス皇国が南下政策の重要拠点とするため、僕の住む国セルドアに宣戦布告してきたのだった。

圧倒的不利と思われたセルドアは、当時開発されたばかりの戦闘技術であるOA&amp;Wを使用する特殊部隊を導入。戦況は一変し、クライス皇国が一足遅れてOA&amp;Wを取り入れた頃には、その領土の三分の二を占領していた。

しかし、首都侵攻を目前にして、時のセルドア王が死亡。指揮系統はめちやくちやになり、やむなくセルドアは、占領した領土の半分を自国の領土とすることを条件にクライス皇国と休戦協定を締結した。

たかだか五年前かと思うかもしれないが、当時小学四年だった僕は、少し前まで戦争をしていたなんて実感は全くない。

いや、全くとは言えないか。むしろ、鮮明にただ一つのことだけを覚えている。

僕は今高校一年生だ。少し寄り道をしすぎてしまったか。辺りももう真っ暗だ。人っ子一人いない。

そんなに何時間も居ただろうか。携帯を家に忘れたから時間が分からない。急いで帰らなければ、と思い駆け出した。

そのとき。駆け出したと同時に、僕の歩く道路の右側の学習塾の二階の窓が突然割れた。

そこで僕は初めて、？それを見た。

まず目に入ったのは、黒い何かだった。

その後にもうひとり、リボルバー式拳銃を二丁構えた男が、その黒い塊を追って出てきた。

「待ちやがれ！」

地面に着地したその長身の男は僕には目もくれず、あるうことか街のど真ん中で銃をバンバン撃ちまくった。

まあ僕しかいないみたいだけど。

何発撃たれたか分からない黒い塊はみるみるスピードを上げて、街中発砲男とかなり距離を取り、逃げ切ったようだ。

その束の間、黒い塊に逃げ切られた拳銃男が行きと同じ速さで戻ってきた。やっぱり銃を撃ちまくりながら。

いや待てよ？撃ってきた？僕を狙って？

だが放たれた弾が撃ち抜いたの僕じゃなかった。撃ち抜かれたのはいつの間にか僕の後を取り囲んだ数人の武装した兵士だった。

「おいお前！こんなとこで何をしている！」

「何って、あなたこそ何をしてるんですか？ それにこの人たちは何なんですか？」

倒れている兵士達を指さしてこれまでの疑問を全て投げかける。

あれ？この人達は撃たれたはずなのに血が流れていない。それに死んでいるようにも見えない。

「何ってお前何も聞いてないのか？今は……」

言いかけたところでまた兵士達が現れた。

「とりあえず話は後だ。逃げるぞ！」

「は、はい！」

いつの間にか15人程の兵士に囲まれていた。

前方の兵士を撃ち、道を開けて学習塾の中へ入った。どうやら中までは追ってこないらしい。

塾と見せかけてどうやら軍の施設のようだ。

「あの、これは一体何が起こっているんですか？」

一息ついて、改めて訊く。

「あのなあ。さっきの放送聞いてなかったのか？」

「放送？」

「避難勧告だよ。ホントは機密事項なんだがなあ　まあここまで見られちゃったらはぐらかしてもしゃあねえか。」

「実はクライスのテロリストが潜入してるってんで俺ら軍人に排除命令が出てな、

今ここには俺しか戦える奴がないもんだからどうしようか考えてた矢先にここに乗り込まれた。そんで追っかけてったって訳さ」

「そうか、僕の見た光景はちょうどそのテロリストを追いかけたところだったのか。」

「でもなんであなたを狙って来たんですか？そいつらは」

「いんや、狙われたのは俺じゃあないな。お前は奴が逃げる時見なかったか？ちょうどお前くらいの歳の女の子を」

「女の子？」

「そっいえば、逃げていく黒い物体がピンク色をした何かを抱えていたよっな。」

「今思えばあの黒いのも抱えられていたのも人だったのだ。」

「奴らはその女の子が目的だったみたいでな、連れ去られちゃあしよっがないって訳で俺一人で出てったんだよ」

「なら、と僕は同じ質問をする。」

「その子を連れ去る理由は何です？あなたをおびき出す為の人質にでもするつもりで？」

「男は腰に巻きつけたバッグと銃に弾丸を補給しながら、いや、と首を振る。」

「間違いなくあの子、アス力を狙ったんだろうよ　あいつはちょっと特別だからな」

「特別？僕の頭の中である答えが導き出されたような気がした。」

「とにかく、俺はアス力を助けに行く。奴らのアジトの情報は軍部から入っているからな」

「じゃあ僕はどうすれば？」

「一緒に来い。どの道危険だが、ここに一人でいるよりはいくらかマシだ」

「わかりました」

「じゃあ 一気に雑魚を蹴散らす。死にたくなかったら絶対に離れるなよ！」

「はい！」

あ、そうだ。と男が思い出したように言う。

「俺はドレフユスだ。お前は？」

「カズマです」

そして僕達は学習塾を出て、女の子を助けに行くというなんだか漫画の主人公みたいな事をするために、

クライスのテロリストの本拠地へと向かった。



## 第2話「誘拐犯の正体」

正直、生半可な道のりではなかった。何度死の淵をさまよったことか。三途の川で溺れてなんとか這い上がってきたみたいな感覚だった。

兎にも角にもなんとか敵のアジトである街外れの工場に辿り着いた。アジトなのに敵が誰もいない。

おそらくここに来る途中に、僕の前を歩いているこのドレフュスさんがもう言葉通り雑魚をすべて蹴散らしたからだろう。

それにしてもすごい。この人の射撃の腕前は。

20人程のテロリストをひとりで、それも無傷で倒したのだから。だがやはり誰も殺していない。

急所をうまく外しているんだろうか？しかし撃たれて血が出ないなんてことがあるんだろうか。

「あの…！」

僕が言葉を発したのと同時にドレフュスさんが手で僕が話すのを制止した。

「静かに。気づかれるぞ！」

その言葉によって一気に緊張が走る。

学校の体育館の半分くらいであるこの工場の中央に、人影。

不気味な黒い何かを纏ったその男は確かにさっきあの学習塾を襲った奴だろう。

その傍らには女の子が一人横たわっている。この子がアスカだ。

突然、ドレフュスさんが両手に銃を構え、12発、つまりは一度に撃てる最大量を男に向かって放った。

だが、男をとりまく黒いものがそれを防ぎ、こぼれ落ちる薬莖の音が辺りに響き渡る。

### 第3話「2つの通り名」

撃たれた男はゆっくりと振り向く。

「やっぱりな」

ドレフユスさんが弾を込めながら、攻撃を防がれたにもかかわらず、不敵な笑みを浮かべ、確信めいた口調で言う。

「お前、「影使い」のセシルだろ。最初に見た時から思っただけが、ここに来てはつきりしたぜ」

「ははあ ばれちゃったかあ」

セシルと呼ばれたその男は、さして驚く様子もなく、頭を抱える。

「そんなに有名人なんですか？こいつ」

通り名があるくらいだから、よっぽど知られた奴なんだろうと思っ  
て訊く。

「まあそうだな、こいつは先の戦争で当時クライス唯一のO A & W  
部隊のエースだった男だ」

その言葉に僕は驚愕した。

「エースだなんてそんなあ。今は知っての通りテロリストとして絶  
賛活躍中さ。それにあんただってあの戦争では国王直轄のO A & W  
部隊10人の内の一人だろ？「無血の遊撃手」ドレフユス大尉さん  
」

「ドレフユスさんがO A & W使い？本当なんですか??」

本人が反応するより早く、ドレフユスさんに尋ねる。

「ああ、お前も見たる？俺に撃たれた奴は傷ひとつ付いちゃいな  
ったのを」

やはりそうか。撃たれて無傷なのもこれで納得がいく。

「じゃあそのアスカって子も？」

すると、セシルがすかさず、

「知らないの？その子はねえ、弱点がないんだよ〜！」  
と言う。

「弱点がない？」

セシルの言う言葉の意味が全く分からなかった。ありえない。

そう、そんな事がありえるのなら、あんなことにはならなかったのだから。

O A & W。それは、ひとつの能力を得る代わりにひとつの弱点を得る力。

弱点は能力によって違う。

それは時に弱点でありリスクであり障害である。

能力も弱点も力を得ないと分からない。故に選ばれた人間にのみ力の譲渡が認められている。

だから弱点がないはずはない・・・

僕はまだ戸惑っていたが、やがてドレフュスさんがセシルに銃を突きつける。

「やっぱり知ってやがったな。ならやはり生かしちゃおけねえ。

おいカズマ！そこはあぶねえ！どいてろ！」

この2人がO A & W使用である事実と、そのO A & Wの定義を根底から覆す少女の存在に、

僕はそんな言葉も耳に入らずただただ呆然としていた。

「ここで死ぬわけにはいかないんだよね〜 この子は僕にとっても必要だからね〜」

そう言うと、セシルは自らの影を鎌の形に変形させ、ドレフュスさ

んへそれを振り下ろす。

ドレフユスさんも応戦するが、やはり弾が影に防がれる。

セシルは今度は無数の紐状に影を変化させ、攻撃する。

これはドレフユスさんが全て撃ち落とす。

そんな攻防を繰り返して、しばらくするとドレフユスさんが僕に言ってきた。

「おい！ぼさつとしてんじゃねえ！何かこの力に思い入れがあるみたいだが、頼みがある！」

「頼み？」

ようやく僕は顔を上げる。

戦いながら、ドレフユスさんはこう続けた。

「そうだ。お前に、OA&W使いになってもらいたい！」

## 第5話「死の真相」

O A & a m p ; W 使いに？ 僕が？

そんなの 答えは決まっている。

「いや です」

「力を得るのは怖いかもしれないが、今は緊急なんだ！頼む！」

「無理ですよ。」

「何をそんなに拒んでいるんだ？ 誰も軍人になれとは言っていない。事が終われば明日からは普通に暮らすことも…」

「殺されたんですよ。兄はその力に殺されたんですよ！」

自分でも信じられないくらいに大声で叫んでいた。

「殺された？ 僕たちの部隊にやられたってことかな？」

剣の形の影でドレフュスさんに斬りつけながらセシルが口を開く。

「違う。兄さんは、実験台になって死んだんだ。O A & a m p ; W の最初の能力者として、死という弱点を背負って。」

そこで驚いた様子でドレフュスさんが言う。

「最初の使い手？ まさか君の兄さんはワビスケさんか？」

「兄を知っているのですか？」

「知ってるも何も、戦争時の俺の所属していた部隊の隊長だった人だ。」

あの人は自らを差し出し、国のために死んでいった。確かに辛いかもしれないが、ワビスケさんが守りたかったこの国が、アス力を奪われることでまた危機に陥るかもしれない！ 君にも O A & a m p ; W 使いになってもらうしかないんだ！」

僕はただ首を横に振った。

助けたい、だけどこの力は…

「迷っているなら一遍死ね。ワビスケさんの弟ならなおさらやってくれると思っただがな！」

そう言うとドレフュスさんは、セシルと距離を取り、銃口を2つと

もこちらに向け、2発発砲した。

そう、今度ははつきりと僕を狙って。

胸のど真ん中に命中したとのほぼ同時に、僕は意識を失った。

## 第6話「少女との邂逅」

しばらく経って、僕は目を覚ました。

撃たれたはずなのに、やはり当然というか、血が流れるどころか無傷だった。

「ハア：ハア：だから俺は無血の遊撃手だって言ってるんだろ？」  
気が付けば隣に横たわっていたドレフユスさんが、僕の心中を察したように言う。

あれ？撃たれた僕とは対照的に、僕を撃つたいわば犯人であるこの人は、血だらけだった。

無理もないだろう。

あんな奴と戦っているのだから。

そうだった。

やっとこの状況を思い出した。

「ドレフユスさん！セシルは倒せたんですか？そしてそのケガ大

丈夫ですか？」

「大丈夫。とはとても言えないが、これくらい何度も経験済みだ。

それとセシルは俺らを必死に捜しているさ。アスカも取り返したことだしな。」

そう言い、僕の方をちらりと見る。

そういえば、何か膝に乗っている。

最初は上にドレフユスさんが脱いだ上着が乗っているだけだと思っていたが、やけに重たい。

そっと上着をどけてみると、目の前にピンクの髪の少女。

すると彼女はちょうど目を覚ました。

そして僕の膝の上で意識を失っていた事に気付いて、悲鳴を上げる。

「んぐっ！」

上げようとしたところで慌ててドレフユスさんが口を塞いだ。

「馬鹿野郎！奴に気づかれるだろうが！」

口を塞いでいた手を離すと、彼女はすかさず言う。

「隊長！なんですかこいつ！変態？」

そう言つて、僕の膝から離れる。

「すまんすまん。面白くなるかと思つてな。それよりお前、誘拐されたんだぞ？まあまだ半分誘拐されたままみたいなもんだがな」

そうだ、セシルをなんとかしなくてはまた彼女が連れていかれるかもしれない。

「確かに誰かに襲われた感覚はあります。それに隊長がそこまでやられてるんだから相手は相当ですね。」

「ああ。そこでこいつが必要つてわけさ。」

ドレフユスさんが僕を指差す。

「この変態、使い手なんですか？とても軍人には見えないんですが」

「さつきから失礼じゃないか？人の事変態呼ばわりして！」

さすがに反論した。僕が可愛い女の子に変態と言われて興奮するよ  
うな奴だと思われては困る。

「じゃあ何者よ？」

「何者つてただの……」

「ただの高校生かと思つたらあの『英雄』ワビスケさんの弟だった  
んだよね」

ドレフユスさんはまたもや銃口を僕の方に向ける。

「この中にはOA&amp;mp;Wの強制発動弾が入ってる。本来はテ  
ストに合格した者しか使い手にはなれねえが、俺ら隊長達には力の  
付与が緊急時のみ認められている。もう一度聞く。使い手になる気  
はないか？」

そのとき、隠れるためのバリケードにしていた工場の廃材を切り裂  
いてセシルが現れた。

「みーつけた！」



## 第7話「覚醒」

「ちい！来やがったか！」

ドレフユスさんは僕に向けていないもう一方の銃で、セシルに発砲した。

すると、辺りに煙が立ち込め始めた。

どうやら煙幕弾を撃つたらしい。

「今の内に逃げるぞ！」

言われるがまま、僕は2人の後を追った。

しかし、外に出るやいなや、眼前にセシルが回りこんでいた。

「隊長！弾貸してもらえます？」

「ああ、10発しか残ってないが使え！」

彼女は弾丸を受け取ると、突然それを宙に浮かせた。

そして生き物でも扱つかのように手で操作し、セシルに向けて飛ばす。

だがセシルは影も使わずひょいと避ける。

「こんなの飛ばしても当たらないし痛くないんじゃないの？ぐあ  
！」

余裕の表情で挑発していたセシルを突然スピードを上げた弾丸が貫く。

「油断したわね。私の能力は重力を自在に操れること。物を浮かせたりそれを動かしたり。今のは地球の5倍の重力をかけたから、普通に銃を撃つより速いのよ。避けられる方がおかしいわ。」

だがセシルは余裕の笑みを崩さない。

すると彼女の背後に、影。

その首を手の形をなした影が締め付ける。

「ぐあああ……」

うめく彼女にセシルは近付き、影をバットのような形に変形させる。「抵抗されるならしかたないな」。手足を折ってでも連れてくよ」

セシルがお手製のバットを振り上げたそのとき、その影が吹き飛ぶ。ドレフユスさんが放った最後の一発が当たったのだ。

その隙に僕はセシルの懐に入り、顔を思いつきり殴った。殴られた本人は2mほど吹っ飛んだ。

「あんだ、その髪…」

僕の赤くなった髪を見て、彼女も状況を理解したらしかった。

「遅くなってごめん。やっと覚悟が決まったんだ」

こうして僕は兄さんを殺した力を得てしまった。

そう、得てしまったのだった。

## 第8話「覚悟」

こうして僕はO A & a m p ; Wの使い手となった訳だが、この国、この力を許した訳ではなかった。

「ドレフユスさん、僕を撃ってください。」

徐々に追いつめられていく彼女を見つめ、僕は言った。

「いいのか？ああ言ったもののこの力は得る能力は大きいけど、どんな弱点がついてくるか分かったものじゃない。俺は知っての通り、早撃ちとかなりの命中力と引き換えに銃では傷をつけられない。君の兄さんのように死なないとも限らないぞ？」

覚悟はできた訳ではない。ただ、

「目の前で苦しんでいる人を見殺しにするくらいなら、この国が兄にしたこととなら変わらない。兄ならこんなとき何を犠牲にしても助けるでしょう。」

O A & a m p ; Wを得るべきか、悩むのは今じゃない。「そういう意味では覚悟が決まったのかもしれない。」

ふっ、とドレフユスさんは軽く口元を歪ませて、銃を向けた。

「俺が援護できるのはあと一発だ。そしてこの状況をどうにかできるのはもうお前だけだ。いくぞ！」

そう言うとすぐに僕に向けて引き金を引いた。

そして、再び彼の弾丸が僕の体を買った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0638z/>

---

OA&W

2011年12月11日11時49分発行